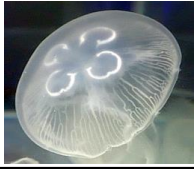
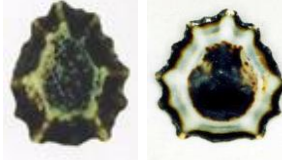
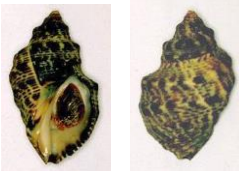


		シニア自然大学校 森と海の自然科 泉南三河川河口域 生きもの調査 (近木川・男里川・樫井川)						年	2019		2020		21	2022		2023		2024		2025		2025年7月30日 指導 児島 格 先生 山田 浩二 先生	
								月	7	10	8	10	10	6	9	8	9	6	9	5	9		
								日	4	10	6	1	7	2	8	31	28	6	19	29	18		
No.	門	綱	目	科	和名	学名	写真	近木川	男里川	近木川	男里川	樫井川	樫井川	近木川	樫井川	近木川	樫井川	近木川	樫井川	近木川	樫井川	備考	
1	海綿動物門	普通海綿綱	イソカイメン目	イソカイメン科	ナミメインソカ	<i>Halichondria panicea</i> (Pallas, 1766)		1 9 近														形は不規則で塊状。全面に細かい粒状の突起が発達する。潮間帯から水深550mの中深層まで広く分布し、岩や石の陰や窪みに着生する。体の色は黄緑色。体内に水を循環させプランクトンや有機物を食べる。	
2					クロイメインソカ	<i>Halichondria (Halichondria) okadai</i> (Kadota, 1922)		1 9 近							2 3 樫							本州中部以南の潮間帯の岩に付着して最も普通に見られる海綿。表面に大小様々な孔の空いた突起を生じ、凸凹している。体色は黒。体の中にフジツボが棲んでいる事がある。	
3					ソダカイダイメイ	<i>Halichondria japonica</i> (Sasaki, 1929)						2 1 樫			2 3 樫							体は赤橙色、定形で大きさもさまざま。体表には無数の小孔が散在し、頂部先端に大孔が開いている。しばしば皮層にカイメンフジツボを共生させる。潮間帯に層をなして付着し、日本各地の沿岸に多い。	
4	刺胞動物門	花虫綱	イソギンチャク目	ギンテジマイソク	ギンテジマイソク	<i>Haliplanella lineata</i> (Verrill, 1871)						2 1 樫	2 2 樫	2 2 近	2 3 樫		2 4 樫	2 4 近	2 5 樫			潮間帯でごく普通に見られる。体長は2~3cm、口盤の径1.5~2cm、足盤の径2~2.5cm。体はほぼ円柱形、その表面は滑らか。体はその地色が暗緑色で、普通は赤か黄色の縦縞が多数ある。	
5				ギンウメボシソク	ヨロイソギ	<i>Anthopleura uchidai</i> (England, 1992)										2 3 樫						体高5~8cm。体は褐色の円筒形で、体壁表面にいぼ状吸盤がある。吸盤に小礫や貝殻片などを付着させる。体上部に96本の触手。その色は透明がかった緑・黄褐・桃色など個体変異が多い。日本固有種で、潮間帯の岩間に生息。	
6		鉢虫綱	旗口クラゲ目	ミズクラゲ	ミズクラゲ	<i>Aurelia coerulea</i> (von Lendenfeld, 1884)														2 5 樫		日本近海の暖流域で最も普通に見られるクラゲ。寒流域にいるのはキタミズクラゲ。直径15~30cm。半透明で寒天状。雌雄異体。4個の丸い胃袋とそれを囲む馬蹄形の生殖腺が傘の中に見えるのでヨツメクラゲともいう。まれに5つ6つある個体もある。	
7	軟体動物門	多板綱	新ヒザラガイ目	クサズリガイ科	ヒザラガイ	<i>Acanthopleura japonica</i> (Lischke, 1873)		1 9 近		2 0 近		2 1 樫		2 2 近	2 3 樫	2 3 近	2 4 樫	2 4 近	2 5 樫			体は楕円形で平たく、背中には一列の8枚の殻(殻板)がある、殻の周りは肉帯という筋肉で囲まれ、トゲや鱗で覆われる。腹側は吸盤で這う。潮間帯の岩礁に付着する。はがされるとダンゴムシのように丸くなる防御姿勢を取る(別名「ジイガセ(爺が背)」の語源)。体長5cm~10cm。	

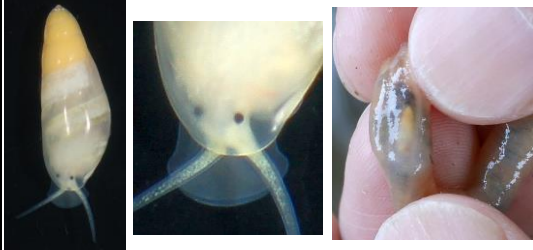
8	軟体動物門	多板綱	新ヒザラガイ目	ケハダヒザラガイ科	ケハダヒザラガイ	Acanthochitona defilippii (Tapparone-Canefri, 1874)		1 9 近						2 2 近		2 3 近				潮間帯にいる。岩の上やくぼみ、転石に生息。新ヒザラガイ目共通で殻板は8枚。それぞれの殻板のそばにトゲのかたまりがある。はがされると身体を丸めることも他のヒザラガイ類と共通。体長6cm前後。
9				ケハダヒザラガイ科	ヒメケハダヒザラガイ	Acanthochitona achates (Gould, 1859)						2 2 椀			2 3 近				北海道南部以南に分布。体長最大4cm。潮間帯の岩礁、転石に生息。殻の両側の肉帯に9対のトゲの束が並び、微細な針がある。ケハダヒザラガイより潮間帯のより上部に住み分ける。	
10				ウスヒザラガイ科	ヤスガリヒザラガイ	Lepidozona coreanica (Reeve, 1847)		1 9 近											潮間帯から潮下帯の転石下に張り付く。他のヒザラガイ類より殻板の幅が広い。殻板の表面に縦の筋が多数あり、ヤスリ状になっている。体長4cm程度。	
11					ウスヒザラガイ	Ischnochiton boninensis (Bergenhayn, 1933)									2 4 ア				北海道南部以南の潮間帯から潮下帯の転石に着く。体長3cm、体幅 1.3cm程度。石の下にいて、石を裏返すと、岩陰に逃げようとする。足が速い。体は平たく長楕円形で、殻の色彩は変化に富み色彩変異が著しい。背面のふくらみは弱く8枚の殻は前後に重なって並ぶ。	
12		腹足綱	後鰓目	アメフラシ科	トゲアメフラシ	Bursatella leachii (Blainville, 1817)								2 2 近					体地色は飴色から暗褐色。体表全体に淡褐色の細点と水色の斑紋が入る。水色の斑紋は黒色で囲まれる。体表には樹枝状の長い突起と、円錐形の短い突起がある。触角と口触手は体地色と同じ色で淡褐色の細点が入る。15cmになる。	
13				クロシタナシ科	クロシタナシ	Dendrodoris arborescens (Collingwood, 1881)								2 2 近					日本全国の沿岸の砂地や砂泥地。普通に見られるものは背面は一樣に黒くて斑紋はない。外套膜の縁と足の縁が僅かだけ黄褐色となっている。体長は7cmに達することがある。	
14			カサガイ目	ツタノハガイ科	マツバガイ	Cellana nigrolineata (Reeve, 1839)		1 9 近				2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀	殻長6～8cm。巻貝の仲間。大型のカサガイ類で、表面は平滑で、青っぽい灰色のスジと灰色地に赤かっ色の細い帯がある。網目模様になることもある。潮間帯の岩礁に腹足で密着。夜間の活動時間が長い。植物食性。
15					ヨメガカサ(ガイ)	Cellana toreuma (Reeve, 1854)		1 9 近		2 0 近		2 1 椀	2 2 椀		2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近		殻長4～6cm。マツバガイより背が低い。殻は細長く表面に放射状の細い筋がある。模様は変化にとんでいる。潮間帯の岩礁に腹足で密着。潮の満ち引きに従い、波打ち際を上下に移動する。植物食性。マツバガイより波あたりの強い場所に住む。

16	軟体動物門	腹足綱	カサガイ目	ユキノカサガイ科	(ウノガイシ)	Patelloida saccharina (Linnaeus, 1758)		1 9 近	2 0 近	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀	殻長3.5cm。殻は厚く殻頂部は強く浸食される。殻表には7~10本の強い肋(ろく・稜)があり、周縁部で突出して、鳥の「鵜」の水かきのついた足に見立てられる。潮間帯の岩礁。潮が満ちた波打ち際を動き回って藻類を食べ、また元の場所に戻る「帰家習性」がある。
17					コウダカア	Nipponacmea concinna (Lischke, 1870)			2 0 近				2 3 椀					殻長3cm前後。正円に近い楕円形。殻頂は前端よりにある。殻表に放射線状に顆粒列が並んでいる。貝殻の裏側は薄青い。殻表は全面暗緑色のものと黄褐色の斑点の出るものと2タイプがある。潮間帯の岩礁上部。昼間は岩陰に隠れている。
18					クモリア	Nipponacmea nigrans (Kira, 1961)				2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀				殻長2cm。殻長は前方にかたよりやや高い。殻の表面には放射状の筋(放射肋)が密に並ぶ。殻の模様は固体により多様。河口周辺の潮間帯半ばの岩礁のすき間や転石の下にいる。
19					コモレビコ	Lottia tenuisculpta (Sasaki & Okutani, 1994)		1 9 近			2 1 椀	2 2 椀		2 3 椀				殻長1.3cm。殻表には均一な太さの細肋が全面にある。黒褐色白の地色に白い放射彩色彩を基本とするが、変化が多い。潮間帯岩礁下部に住む。フジツボと共に生息している。生息数は多くない。
20					シボリガ	Patelloida signata (Pilsbry, 1901)				2 0 男		2 2 椀						殻長1.5cm以下。殻口が楕円形の低い円錐形。白地に褐色の放射線が約8条のびる。殻内面は白色。塩分濃度の低い内海に住む。
21					カモガイ	Collisella dorsuosa (Gould, 1859)									2 4 椀		2 5 椀	殻長径2cm、殻幅1.7cm、殻高1.3cm。潮間帯上部に着生。生活域は、最大満潮線より1m位の高さの飛沫帯の基物を必要とする。カサガイの仲間では潮間帯最上部に生息する種。大阪湾では1980年中頃から生息し始め、波の打ち寄せるテトラポットや防波堤によくコロニーを作って着生している。
22				ヨメガイ科	ハツコウガサ(ガイ)	Cellana stearnsii (Pilsbry, 1891)					2 1 椀							殻長3.5~6cm、殻幅3~5cm前後の楕円形で、殻頂は前寄りにある。潮間帯の岩礁部でふつうにみられる。殻の内面には真珠光沢があり、光に透かして見ると美しい亀甲模様に見え、これが和名の由来。カモガイより下方に着生。垂直方向で住み分けが見られる。
23				コガモガイ科	クサガイロアオ	Nipponacmea fuscoviridis (Teramachi, 1949)										2 4 近		北海道から沖縄まで広く分布し、潮間帯の中部日表に着生。中型の笠貝で2cm程度。貝殻は上下につぶれたように平らで、頂点は極端に前方に寄る。模様をもつ個体が多い。貝殻表面はコウダカアオガイほど粗さはない。貝殻内面は鮮やかな青緑色を呈し、和名はこれに由来する。

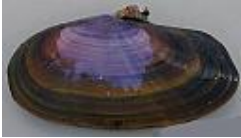
24	軟体動物門	腹足綱	基眼目	カラマツガイ科	キクノハナガイ	Siphonaria sirius (Pilsbry, 1894)		1 9 近	2 0 近	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	殻長2cm。カサガイ類のウノアシに似ているが、放射状の肋の間に細い肋がある。潮間帯中部の岩礁に生息。本種は肺呼吸。ウノアシはえら呼吸。藻類を食べにかけ同じ道をたどって元に戻る「帰家習性」がある。右は内面。左上に空気呼吸用の穴(→)がある。 	
25				カラマツガイ	Siphonaria japonica (Donovan, 1824)		1 9 近	2 0 近	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近			2 4 椀	2 4 近	殻長1.9cm。潮間帯上部、岩礁。殻長約1.5cm。本種も肺呼吸。殻は笠形で灰色、内面はこい褐色で、ふちは黄色。表面に15本ほどの放射状の肋がある。キクノハナガイとともに、「帰家習性」がある。肺呼吸。5,6月ごろ薄黄色の丸い卵嚢が岩やテトラポット上によく見受けられる。		
26			中腹足目	タマガイ科	ツメタガイ	Glossaulax didyma (Röding, 1851)		1 9 近	2 0 男		2 2 ア					2 5 椀	殻長5cm。海底に埋入。卵と砂を粘液で固めて「砂茶碗」とよばれる卵嚢を作る。アサリなどの二枚貝を捕まえると、やすりのような歯舌を用いて獲物の殻頂部を削り、2mm程度の穴をあけて軟体部を食べる。  砂茶碗	
27				カリバガイ科	シマメノウフネガイ	Crepidula onyx (Sowerby, 1914)		1 9 近				2 2 近	2 3 近	2 4 ア		2 5 アD	本来は北米原産の外来種。殻長3cm。殻表がほとんど平滑で不規則な褐色斑や縞がある。アワビ類やアカニシ。アズマニシキなどの生きた貝類の殻に腹足で付着し、排泄物などを食べる。石や沈木にも着く。雑食性。雄から雌に性転換する。	
28				ムカデガイ科	オオヘビガイ	Serpulorbis imbricatus (Dunker, 1860)		1 9 近				2 2 近	2 3 近	2 4 椀			殻幅は5cm。潮間帯の岩礁。殻の一部あるいは大半を石灰質を分泌して固着し、トグロを巻いた状態で成長する。殻口から粘液の糸を出して餌をからめ取りこむ。懸濁物食性。	
29				タマキビガイ科	アラレタマキビ	Nodilittorina radiata (Souleyet in Eydoux & Souleyet, 1852)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	殻長8mm。小型だが殻は堅固。タマキビより上の、波当たりの強い潮間帯の最上部。飛沫帯に住む。潮が満ちてくるとそれに追われるように岩を這い上がり、潮が引くと濡れている間に下りてくる。貝であるのに、水をきらう。
30					タマキビ	Littorina brevicula (Philippi, 1844)				2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近		2 5 椀

31	軟体動物門	腹足綱	中腹足目	タマキビガイ科	マルウズビ タマキビ	Littoraria (Palustorina) articulata (Philippi,1846)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近		2 3 近		2 4 近	2 5 椀	殻長1.5cm。殻は褐色色で、螺層の膨らみは強く、細かいウズラ模様がある。縫合はくびれる。転石・テトラポットに着生。河口護岸壁の裂け目などにも付着。潮間帯の最上部で生息する。	
32				リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	Pomacea canaliculata Lamarck, 1819							2 2 近D						ジャンボタニシ。殻高5cm以上になる大型の淡水性の巻き貝。殻の形状はタニシ様。南米原産。1981年に食用目的で台湾から輸入され、盛んに養殖が始められたが、消費者の嗜好に合わず、養殖業者の廃業等によって放置され、稲に大きな食害をもたらしている。生息域は陸地淡水。河川を流下した貝が海岸によく打ち上がる		
33			新腹足目	アッキガイ科	アカニシ	Rapana venosa (Valenciennes,1846)		1 9 近				2 0 男						2 4 椀			殻長10cm。殻口の内面が赤みを帯ている。腹足で密着。肉食性。アッキガイ科の巻貝の鰓下腺（パープル腺）から得られる黄緑色の分泌物は、日光で紫色に変化し安定する。強い臭素を含んでいるが、古代から世界各地で貝紫の染料とされていた。堺第七三区で拡張21cmをこえる死骸を採取。これが大阪湾での最大記録。→下のイボニシの説明図参照
					ナギナタホオズキ												2 4 ア			アカニシの卵囊。海底の小石や貝殻・沈木などに夏季に産み付けられる。その形からナギナタホオズキとよばれる。「うみほおずき」は海産の巻貝類の卵囊の総称。半透明の革質で非常に丈夫で、中身を出して色染めしたものが売られ、「ほおずき」と同じく口に含んで鳴らして遊ぶ。 *海ほゝづき鳴らせば遠し乙女の日 杉田久女	
34					イボニシ	Thais (Reishia) clavigena (Küster,1860)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀	殻長3～5cm。転石・テトラポットに腹足で着生。岩礁のフジツボ類や二枚貝に穴を開けて肉を食べる。6月～8月、岩の下に群れて卵のうを産みつける。 右は『三重県水産図解』（明治16年）の海女。頭かぶりに貝紫(アカニシの項参照)で護身符としてセーマンやドーマンを染めている。 ☆ 𠄎𠄎𠄎	
					イボニシの卵	Thais (Reishia) clavigena (Küster,1860)		1 9 近							2 2 近						
35					レイシ	Reishia bronni (Dunker, 1860)														2 4 近	

36	軟体動物門	腹足綱	新腹足目	ウミニナ科	ウミニナ	Batillaria multiformis (Lischke,1869)		1 q 近	1 q 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椽	2 2 椽	2 2 近	2 3 椽	2 3 近	2 4 椽	2 4 近	2 5 椽	殻長3.5cm。干潟や潮間帯の砂泥底に群がっている。泥の上を歩き回り、表面の有機物や藻類など食べる。外唇が張り出す。2009年頃より生息数が増加する。	
37				ホソナウミ	Batillaria attramentaria (G.B.Sowerbyll, 1855)			1 q 男		2 0 男		2 2 椽								殻長3cm。海岸の砂泥地や岩礁に生息する。ウミニナより細長い。ウミニナと違って浮遊幼生にならず子貝になる。貝殻の色は灰色や黒褐色で縫合に沿って白い彫刻のようなものがある。潮間帯の砂底。ウミニナより低い潮位にすむ。	
38				ムシロガイ科	アラムシロ (ガムシロ)	Reticunassa festiva (Powys, 1835)		1 q 近			2 0 男	2 1 椽					2 3 近	2 4 椽	2 4 近	2 5 ア	殻長1.5～2cm。潮干狩りの時に砂浜を歩いている姿を見かける。殻の色は黄色に近いクリーム色。溝の部分は黒い。殻のいぼはやや大きめ。河口干潟などの砂泥底にすむ。粗いムシロのような外見からの和名。ムシロガイ類は代表的な死肉食性で「海の掃除人」。
39				フトコロガイ科	ムギガイ	Mitrella bicincta (Gould, 1860)		1 q 近					2 2 ア								
40	古腹足目		ニシキウズガイ科	イシダタミ	Monodonta confusa (Tapparone-Canefri,1874)		1 q 近	1 q 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椽	2 2 椽	2 2 近	2 3 椽	2 3 近	2 4 椽	2 4 近	2 5 椽	殻高2cm。殻の表面に、石だたみのような模様が出るのでこの名がある。潮間帯の中部域の岩礁に腹足で着生。波打ち際には岩の表面に出て活発に摂食活動をし、干潮時には岩陰に隠れる。雑食性。		
41				クロツケ	Monodonta neritoides (Philippi, 1849)		1 q 近	1 q 男		2 0 男					2 3 椽					殻高1.5cm。イシダタミより小さく、背が低い。表面がなめらか黒地に細かい赤と緑の斑点がある。潮間帯の岩礁。	
42				コシダカガンガ	Omphalius rusticus (Gmelin,1791)		1 q 近			2 0 男	2 1 椽		2 2 近					2 4 椽			殻高2.8cm。転石・テトラポットに着生。殻はクボガイよりも色が薄く灰色。うねは太く、へそ穴は丸く深く開く。春先の「磯もん」(磯の食用巻き貝)のひとつとして販売される地域がある。  クボガイ→
43				サザエ科	スガイ	Lunella coreensis (Récluz, 1853)		1 q 近		2 0 近	2 0 男	2 1 椽	2 2 椽		2 3 椽	2 3 近	2 4 椽ア	2 4 近	2 5 椽	殻幅は2.5cm。サザエを丸く小さく平たくしたような形。サザエのように硬く厚い石灰質の蓋をもつ。その蓋のふくらんだ方を下にして酢に浸すと、酸で蓋の石灰質が解ける時にCO2の気泡を出し回転することから、酢貝(すがい)と呼ばれた。潮間帯の岩礁や転石に住む。	

44	軟 体 動 物 門	腹 足 綱	アマ オ ブ ネ ガイ 目	アマ オ ブ ネ ガイ 科	イ シ マ キ ガ イ	Clithon retropictus (Martens, 1879)		1 ♀ 近	1 ♀ 男	2 0 近	2 0 男			2 2 近		2 3 近			2 5 極	殻長1~3cm。殻は丸みが強くてよく膨れ、螺塔は低い。幼生は海で育ち、幼貝になると川をさかのぼり、淡水にすむようになる。河川の河口から中流域の転石に着生。岩の表面の藻類を食べる。
45			盤 足 目	ヨ カ ワ サ ン シ 科	ク リ イ ロ カ ワ ザ ン シ ヨ ウ	Angustassimine a castanea (Westerlund, 1883)			1 ♀ 男		2 0 男									殻長0.4~0.5cmと小型で円錐形をしている。黒っぽい茶色で光沢がある。河口干潟や内湾ヨシ原内の転石の間に生息する。
46				タ マ キ ビ 科	コ ビ ト ウ ラ ウ ズ ガ イ	Peasiella habei (Reid & Mak, 1998)									2 3 極					殻幅0.3cmでとても小さい。殻は横幅が広く底は平たい。緑褐色に暗紋が不規則に散らばる。潮間帯中~上部の岩礁のくぼみやフジツボの間というわずかなくぼみにはまっていて、非常に見つけづらい。
47			翼 舌 目	イ ト カ ケ ガイ 科	イ ナ ザ ワ ハ バ ガ イ	Alexania inazawai(Kurod a, 1943)				2 0 近										殻長0.7cm。潮間帯の岩につくタテジマイソギンチャクに付着する。石灰質の蓋を持つ。2002年9月7日近木川河口での初記録(貝塚市自然遊学館「自然遊学館だより」No. 26 (2003年1月))。
48			翼 舌 目	ハ ナ ゴ ウ ナ 科	ヒ モ イ カ リ ナ マ コ ツ マ ミ ガ イ	Hypermastus lacteus (A. Adams, 1863)							2 2 極						2 5 極	関東以西の内湾に分布。内湾奥部や河口の干潟の干潮時に露出する礫や貝殻混じりの砂泥中に浅く潜行して生活するヒモイカリナマコの体内に棲む。殻長0.5cmほどの紡錘形をし、殻頂部は突出。殻表面は光沢があり平滑。殻はほぼ透明で、生時は黄色の軟体や内臓さらにかわいい眼(写真左・写真中に拡大)が透けて見える。写真右はヒモイカリナマコ体内のヒモイカリナマコツマミガイ。
49			吸 腔 目	フ ト ヘ ナ タ リ 科	フ ト ヘ ナ タ リ	Cerithidea rhizophorum (A. Adams, 1855)			1 ♀ 男		2 0 男									殻長4cm。口吻が全体的にクリーム色のまだら模様をしている。河口の汽水域の干潟に砂泥底やアシ原に生息。成長すると殻頂が欠ける。徒然草34段「甲香は、ほら貝のやうなるが小さくて口のほどの細長にして出でたる貝のふたなり。武蔵国金沢といふ浦にありしを所の者はへなたりと申しはべるとぞ言ひし」。甲香は香材の一つ。
50				ト ゲ カ ワ ニ ナ 科	カ ワ ニ ナ	Stenomelania rufescens (Martens, 1860)			1 ♀ 男		2 0 男									殻長5cm。カワニナ類と似ているが、別のグループ。熱帯域にたくさんの種類がいる。河口に近い河川の砂泥底。砂泥中の有機物を食べる。汽水域の小石混じりの砂泥地。

51	軟体動物門	腹足綱	異旋目	トウガタガイ科	カキウラクチ キレモドキ	Brachystomia bipyramidata (Nomura, 1936)					20男									殻長0.5cm。乳白色で黄褐色の殻皮をかぶる。潮間帯の干潟や岩礁のマガキの体液を吸う。
52			頭楯目	ヘコミツララガイ科	コメツブガイ	Retusa (Decolifer) insignis (Pilsbry, 1904)						22ア								5mm程度の微小貝。潮間帯に近いアマモ場の砂浜によく生息する。大阪湾ではアマモ場の減少と共に希少種となっていたが、最近では採集例が増えつつある。近似種にマツシマコメツブがある。コメツブガイの方が螺塔が飛び出している。貝塚市自然遊学館「自然遊学館だより」No. 74(2015年2月)参照。
53		二枚貝綱	マルスダレガイ目	キクザル科	キクザルガイ	Chama japonica (Lamarck, 1819)										24ア				殻高は4cm程で、重厚。類円形で、不等殻。左殻は強く膨らみ、前側が広く固着面となる。右殻の膨らみは弱く、全面が小さい棘に覆われる。殻色は白色で、後方が赤褐色に彩色された個体が多い。潮間帯から水深30m程までの岩礁底から礫底に生息する。普通種。
54				マルスダレガイ科	カガミガイ	Dosinia japonica (Reeve, 1850)										24ア	25ア			北海道南西部から九州、朝鮮半島、中国大陸南岸。湾内の干潟、砂地などに棲息。貝殻は8cmくらいまで成長する。前後で白い。円形に近く、膨らみは少ない。砂に潜り、水管を伸ばして海中の植物プランクトンや浮遊有機質をこしとって食べている。堆積物食性。
55					アサリ	Ruditapes philippinarum (Adams and Reeve, 1850)		19近	19男	20近	20男	21椀	22椀ア	22近	23椀	23近	24椀	24近	25椀ア	潮間帯や遠浅の砂泥地に生息。殻高は2.5cm、殻長は3.5cm、殻幅は1.5cmほど。殻は横長の楕円形で厚く、よく膨らむ。殻表面は粗い布目状となっている。その模様や色の変化は極めて多様である。 *「貝毒」による中毒は、2月ごろから発生する毒性のプランクトンを食べた貝(「懸濁物食性」の貝)を食べることで発生する。懸濁物食性の貝類すべてが対象になる。
56					ヒメアサリ	Ruditapes variegata (Sowerby, 1852)					20男									アサリより小型であるための名。とくに殻幅が薄い。潮間帯～水深5mの外洋に面した岩礁域の岩、石などの間の砂地。アサリと違い生息数が少なく漁獲対象ではない。しかし、海水で砂出しをし、水から煮込んでみそ汁にすると大変美味。大阪湾にも少ない。岬町には生息。
57				シジミ科	ヤマトシ	Corbicula japonica (Prime, 1864)		19近												河口の汽水域の砂底に生息。殻は丸みを帯びた三角形で、よく膨らむ。殻頂は高い。殻皮は光沢のある黒色。殻長約3cm。

58	軟体動物門	二枚貝綱	マルスダレガイ目	イワホリ 科	セミアサリ	Claudiconcha japonica (Dunker, 1882)		1 ♀ 近		2 0 近				2 3 榧	2 3 近		2 4 近		殻長3cm。潮間帯～水深10m。柔らかな泥岩・サンゴ やゴカイの棲管の群塊などのすき間に住み着く。外 形は不規則なことが多い。右殻が左殻より大きく、 かつ左殻を抱き込むような形になる。大阪湾では潮 間帯のカンザシゴカイの棲管群塊内に埋没して生息 する。		
59				シオサザ ナミ科	ムラ ガイサ キ	Soletellina diphos (Linnaeus, 1771)								2 3 ア		2 4 ア		2 5 ア D	殻長10cm前後になる。貝殻は薄く褐色の殻皮の下は 紫色。水深20m前後までの亜潮間帯に深く潜る。懸 濁物食性。房総半島以南、台湾に分布。		
60				チドリ マス オ科	クチ バ ガイ	Coecella chinensis (Deshayes, 1855)		1 ♀ 近	1 ♀ 男	2 0 近	2 0 男		2 2 ア	2 2 近	2 3 榧	2 3 近		2 4 近	2 5 榧	殻長2.5cm。長楕円形。大阪湾では、潮間帯に住む 二枚貝では最上部の砂～砂礫底に生息する。殻は黄 褐色の殻皮に被われる。内面は白色。	
61				フナガタ ガイ科	トウ ネナ シ ガイ	Trapezium liratum (Reeve, 1843)			1 ♀ 男		2 0 男			2 2 近						殻長4cm。長楕円形。殻はやや薄く、膨らみは弱 い。表面は平滑。汽水域の潮間帯の礫やマガキなど の殻に足糸(そくし)で付着する。	
62				バカガイ 科	バカ ガイ	Mactra chinensis Philippi, 1846							2 2 ア					2 4 ア		2 5 ア	北海道から九州までの潮間帯から水深20m程度まで の砂泥地に埋在。食用貝としてよく広く知られてい る。大きさは6cm前後。むき身はアオヤギ(青柳)と 呼ばれ、すしネタとなる。
63				マテガイ 科	マテ ガイ	Solen strictus (Gould, 1861)							2 2 ア		2 3 ア		2 4 ア		2 5 ア	北海道南部以南の内海の砂浜に見られる。特に西日 本で多く食用とされる。特徴的な細長い形の薄い殻 を持ち、10cm程度になる。砂に数10cm～1m程度の穴 を掘り住む。巣穴に塩を振り込み巣穴から飛び出す 貝を捕らえる独特の捕獲法がある。	
64				ニッコウガイ 科	ユウシ オガイ	Moerella rutila (Dunker, 1860)									2 3 ア		2 4 ア		2 5 ア 幼	殻長は1.5cm程で、薄質。亜三角形で、腹縁中央か ら前端が丸い。貝殻表面は白または淡い橙色で鈍い 光沢を持つ。内湾に面した穏やかな海域で、陸奥湾 以南の潮間帯の砂泥底に生息する。	
65					ヒメシ ラトリ	Macoma incongrua (Martens, 1865)												2 4 ア			九州～北海道。潮間帯から水深50mの泥底。殻は薄 いオレンジ色から灰褐色で灰色の殻皮がある。一般 的な二枚貝が水中の懸濁物を吸い込んで餌にするの とは異なり、長い水管を伸ばして海底に堆積した有 機物を吸い込んで食べる。
66	フネガイ 目	フネガイ 科	カリガ ネ エガイ	Barbatia virescens (Reeve, 1844)		1 ♀ 近					2 1 榧	2 2 榧		2 3 榧	2 3 近	2 4 榧	2 4 近	殻長5cm。中潮帯から低潮帯の岩礁のすき間に足糸 で付着する。殻は白く膨らみは弱い。成長脈は周期 的に強くきざまれる。殻皮は周辺で厚く、毛状にな る。懸濁物食性。			

67	軟体動物門	二枚貝綱	イガイ目	イガイ科	ホトガイ	Musculista japonica (Dunker, 1857)		1 q 近		2 0 近	2 0 男		2 2 ア	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀 ア	殻長2.2cm。薄質で扁平。殻皮は緑褐色。足糸でからまって群れ、海底に敷き詰めたように集団で生活している。内湾の潮間帯から水深10mまでの砂泥底。
68					クロガイ	Xenostrobus atratus (Lischke, 1871)			1 q 男		2 0 男									殻長1.5cm。やや薄質でやや扁平。短く高い。殻皮は黒紫色で平滑。潮間帯上部から中部にかけての岩やマガキに着生。イワフジツボと混生すること多い。
69					ワコヒバリエガイ	Xenostrobus securis (Lamarck, 1819)			1 q 男		2 0 男		2 2 椀	2 2 近						殻長2~3cm。殻皮は黒紫色で平滑、光沢がある。オーストラリア方面が原産。1970年代後半に日本に定着。発見された西宮市の香櫨園浜にちなみ、菊池典男氏により命名。内湾の潮間帯から水深10mまでの汽水域の護岸やカキ殻などに付着。
70			ウミタケガイモドキ目	オキナガイ科	ソトオリガイ	Laternula (Exolaternula) marilina (Reeve, 1863)				2 0 近		2 1 椀							2 5 ア 幼	殻長5cm。これよりはるかに長い水管を出す。水管は完全に殻の中に収まらない。殻は薄く半透明でよく膨らむ。ちょうつがいの上下に細い縦筋が通る。潮間帯から水深20mまでの砂泥底。ソトオリは「衣通(そとおり)」が語源。衣通姫は、その美しさが着物を通り抜けて感じ取られたとされる記紀に登場する女性。
71			カキ目	イタボガキ科	マガキ	Crassostrea gigas (Thunberg, 1793)		1 q 近	1 q 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀	殻高15cm。殻長15cmの長楕円形を基本とするが、固着する対象により殻形は変化する。汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底によくカキ礁を作る。マガキガイ(高腹足目ソデボラ科)という貝は別種。 マガキガイ(殻長6cm) → 
72					ケガキ	Saccostrea kegaki (Torigoe & Inaba, 1981)		1 q 近		2 0 近		2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀		2 4 椀	2 4 近		殻高5cm。殻長8cmの小型のカキ。不定形であるが基本は楕円形。小さい時は殻周縁が紫色に染まり、パイプ状突起が顕著である。潮間帯から潮下帯の岩礁や岩壁に付着し群生する。マガキより塩分濃度の高い海域に住む。
73					イワガキ	Crassostrea nippona (Seki, 1934)		1 q 近	1 q 男											殻高12cm。殻長は20cm以上になる。長楕円形で厚質。殻頂(殻のてっぺん)で岩に着く。殻の周縁や表面には突起はないが、何枚もの薄い板をを重ねたような構造となっている。食用。潮間帯から3mの岩礁。マガキより生育深度が深い。

74	軟体動物門	二枚貝綱	イタヤガイ目	ナミマガシワ科	ナミマガシワ	Anomia chinensis Philippi, 1849								2 2 近			2 4 椀	2 4 近		浅海の岩や小石などに足糸で付着し、貝殻はほぼ円形で薄く、殻長約4cm。左殻は雲母状の光沢があり、白・黄・赤橙色など個体により多彩。右殻には足糸を出す大きな穴がある。
75	星口動物門	スジホシムシ綱	スジホシムシ目	スジホシムシ科	スジホシムシ	Sipunculus nudus (Linnaeus, 1766)							2 2 ア				2 4 ア		本州、四国、九州の潮間帯から浅海までの砂泥中に穴を掘ってすむ。体はやや赤みを帯びた乳白色の円筒形で、長さは10～20cm、幅1～1.5cm。表面は滑らかであるが、体壁の縦筋層と環筋層が規則正しく交差して碁盤目状になっている。	
76					スジホシムシモドキ	Siphonosoma cumanense (Keferstein, 1867)						2 2 ア					スジホシムシと同じ環境にすむ。スジホシムシと同様にハナビラガイ又はスジホシムシヤドリガイという二枚貝が着生していることがよくある。スジホシムシと共に釣りエサ に用いられる。			
77	環形動物門	多毛綱	イソメ目	イソメ科	イワムシ	Marphysa sanguinea (Montagu, 1804)							2 2 近						イワイソメ・本虫・マムシ・エムシなど20以上の別名がある。体長 30～50cm、体節数 350内外。日本各地の海岸の岩のすきまや砂泥の中にすむ。タイ・スズキ・キス・イサキ釣りなどのエサとして多用される。	
78				ナナテイソメ科	スゴカイ(ヘイソメ)の棲管	Diopatra sugokai (Izuka, 1907)									2 4 椀			貝殻片、海藻、ごみなどをつけた管(巢)の中にすむところからの名。潮間帯から水深20mくらいまでに生息する。砂泥底上に、特有な管の先端を出している。 		
79				ゴカイ科	ヤマトカワゴカイ	Hediste diadroma (Sato & Nakashima 2003)							2 2 椀					2 5 椀 S P	体長10～15cm。各地の河口～汽水域の砂泥中に棲む。従来、ゴカイ(Hediste japonica (Izuka, 1908))とされてきた種は、現在は、ヤマトカワゴカイ・ヒメヤマトカワゴカイ・アリアケカワゴカイの3種に分類されている。	
80				ケヤリ目	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイの棲管	Serpulidae					2 0 男	2 1 椀			2 3 近	2 4 椀		カンザシゴカイは、環形動物門多毛綱定目カンザシゴカイ科Serpulidaeに属する種類の総称。頭端にある鰓冠(さいかん)の一部が変形してできた殻蓋(かくぶた)をかんざしに見立てて名づけられた。虫体はいずれも石灰質の管の中にすみ、殻蓋で管の入口をふさいで身を守る。	

81	環形動物門	多毛綱	ケヤリ目	カンザシゴカイ科	ヤシゴカイ	Spirobranchus akitsushima(Nishi et al.,2022)											2 3 近			石灰質の殻で棲管を作り、その中に住んでいる。棲管が水色を呈し、背にキールを持つのが特徴。潮が満ちると棲管からケヤリムシに似た小さな鰓冠（さいかん）と呼ばれるエラを出し、海中を漂う浮遊物（プランクトンや有機物）を集めて食べている。
82			フサゴカイ目	ミズヒキゴカイ科	ミズヒキゴカイ	Cirriformia tentaculata (Montagu, 1808)						2 2 ア							体長3～15mm. 体はやや太くてずんぐりしている。眼はない。日本全国の浅海域に分布。砂泥性海岸の潮間帯に普通にみられ、かなりの汚染域にも群棲する。写真の個体は触手が出ている状態。	
83			イトゴカイ目	タマシキゴカイ科	タマシキゴカイの卵囊	Arenicola brasiliensis (Nonato, 1958)										2 4 ア			タマシキゴカイは干潟の砂泥中にトンネル状の棲管を作って潜む。棲管は深さ30-60cmまで垂直に掘られ、中は粘液で裏打ちされる。垂直に掘られた底から棲管は横に伸び、その先から裏打ちのないトンネルが地表まで掘られる。全形はUの字状となる。卵囊はゼリー状で経10cm程度。	
84		貧毛綱	新貧毛目	フトミミズ科	イソミミズ	Pontodrilus litoralis (Grube, 1855)		1 9 近					2 2 椀					2 5 ア	体長10cm、体幅0.2cm内外。腹面に挟着器を持つ海産のミミズ。体節約100。環帯は13～17節ある。岩石に覆われた磯(イソ)のような環境には生息しないことから「ハマミミズ」という名が、よりふさわしいという説がある。	
85	扁形動物門	渦虫綱	多岐腸目	ヒラムシ		Polycladida SP.										2 3 近			ヒラムシ類は、海産の扁形動物渦虫綱ヒラムシ目（多岐腸目）動物の総称。海底の岩の上などを腹面をうねらせてはい回って生活する。肉食性が多く、体の扁平さを活用して貝の隙間から侵入し貝肉を食べる。同じく有棒状体綱に属すプラナリアと共に、高い再生能力を持つとされる。	
86	節足動物門	顎脚綱	無柄目	クロフジツボ科	クロフジツボ	Tetraclitidae Gruvel, 1903							2 2 椀		2 3 椀	2 3 近	2 4 椀		高さ4cm、底面の直径5cmに達する大形種。岩礁の潮間帯上部に群れをなしてつき、クロフジツボ層を形成する。本州北部より九州南端まで分布。急な円錐形で、厚い4枚の周殻よりなり、境界がはっきりしないことが多い。殻口は円形で、小形個体では小さいが、老成すると大きくなる。地方によっては軟体部をみそ汁の実にする。	
87				フジツボ科	タテジマフジツボ	Balanus amphitrite (Darwin, 1854)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀		2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 5 椀	直径1～2cm。殻表はなめらかで、暗紫色の縦縞模様がある。潮間帯～水深50cmの岩礁。岩に固定し、6対の白い蔓脚(まんきやく)でエサを集める。外来種。	

88	節足動物門	顎脚綱	無柄目	フジツボ科	シロスジフジ	Balanus albicocatus (Pilsbry, 1916)		1 9 男	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀					直径 2cm。殻口は広く、ほぼ五角形。各殻板は灰褐色ないし暗紫灰色で、数本の太い白色の縦走肋をもつ。内湾性で、特に河口付近の岩礁や栈橋の橋桁などに群生して固着し、低塩分濃度によく耐える。本州各地から台湾、中国に分布する。
89					アメリカフジ	Amphibalanus eburneus (Gould, 1841)									2 4 椀	2 4 近		
90			有柄目	ミヨウガイ科	カメノテ	Pollicipes mitella (Linnaeus, 1758)		1 9 近	2 0 近	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀	大きさは3～4cmが普通だが、7cmに達する個体もいる。形がカメの前足に似ている。潮間帯岩礁の割れ目に群生し、波によって運ばれてくる餌を紫色を帯びる蔓脚を伸ばげて捕食する。 蔓脚を伸ばげたカメノテ→ 
					フナムシ	Ligia exotica (Roux, 1828)		1 9 近	2 0 近	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀			体長5cm。体は平たく多くの節にわかれ、7対の歩脚がある。頭部には長い触角と大きな複眼があり、尾部には2つに枝分かれした尾脚が1対ある。熱帯から温帯の海岸に広く分布し岩場をすばやく走り回る。泳ぎは上手だが水中で過ごすことはない。
92	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	オサガニ科	オサガニ	Macrophthalmus abbreviatus (Manning & Holthuis, 1981)			2 0 近					2 3 近		2 4 近		甲長1.7cm、甲幅3.5cmまで。甲の長さが幅の2倍ほど。横長で四角い。眼柄が白くて長い。オスのハサミにツブツブがある。水通しのよい内湾や砂質底に生息。	
93				ヤマトオサガニ	Macrophthalmus japonicus (De Haan, 1835)		1 9 男	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀				2 4 椀			甲長3cm、甲幅4cmまで。横長で四角い。眼柄が長い。河口の泥干潟にすみ斜めの巣穴をほる。泥の中の有機物を食べる。ウェイピングは、ハサミが目の高さまでしか上がらず、かつ開かない。（ヒメヤマトオサガニのウェイピングは、ハサミが高く上がりかつ開く、万歳型。）	
94				コメツキガニ	Scopimera globosa (De Haan, 1835)		1 9 近	2 0 近	2 1 椀									甲長9mm、甲幅10mmまで。内湾や河口干潟の砂質・砂泥底に生息。干潟で最も一般的なカニ。養分をこし取った砂泥をだんごのように丸めて巣穴の周りにばらまく。目が飛び出している。

95	節足動物門	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	モクズガニ科	モクズガニ	Eriocheir japonica (De Haan, 1835)					20男	21檜	22檜			24檜	25檜	甲幅は8cm、体重180gほどに成長する。ハサミに長い毛が密生し、藻屑に見えることから和名。河川の河口から中流域。秋に河口に下り幼生を海に放つ。初夏に稚ガニが川を上る。食用で有名な「上海ガニ」の同属異種。日本各地で食用にされている。		
96					アシハラガニ	Helice tridens (De Haan, 1835)			19男		20男			22近						甲長2.2cm、甲幅2.5cm程度。全体的に緑色をおびた褐色でハサミ脚は黄色をおびている。河口域に生息して、アシ原に巣穴を掘る。
97					ヒメガニ	Helicana japonica (K. Sakai & Yatsuzuka, 1980)					20男									甲幅2cm程度。アシハラガニよりも小さく、また、短くてやわらかい毛が前から3または4本目までの脚に生えている（アシハラガニは2本目まで）。
98					ヒライソガニ	Gaetice depressus (De Haan, 1833)		19近		20近	20男	21檜	22檜	22近	23檜	23近	24檜	24近	25檜	甲長2cm、甲幅2.5cm程度。岩礁域の転石場に多い。イソガニに比べ甲が平坦で、色彩や模様の変化に富む。口元の顎脚を使って水の中から有機物をこし取る特異な採餌を行う。雄はハサミが大きい。子どもには甲に白い斑文がある。
99					ソケガニ（仮）	Gaetice sp.		19近												2008年と2009年の「大阪湾生き物一斉調査」の際に発見された。新種ではないかとされ、「ケアシヒライソガニ」と仮称されている。甲幅約2cmで、ヒライソガニよりもやや小型。甲羅の背面が平たく、歩脚に短い毛が多数生えているのが特徴。
100					イソガニ	Hemigrapsus sanguineus (De Haan, 1835)		19近				21檜	22檜		23檜					甲長3.1cm、甲幅3.8cm程度。磯で普通に見られるカニでオスのハサミの根元に柔らかいふくろのようなものがついている。ヒライソガニより甲に膨らみがある。
101					ケフサイソガニ	Hemigrapsus peniciliatus (De Haan, 1835)		19近	19男	20近	20男	21檜	22檜	22近	23檜	23近	24檜	24近	25檜	甲長3cm、甲幅3.5cm程度。オスのハサミの又に毛のふさがある。オス・メスともに裏側の腹の上部を中心に小さな黒斑がある。 

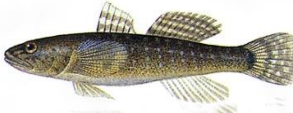
102	節足動物門 軟甲綱（エビ綱） 十脚目（エビ目）	モクズガニ科	タカノケフサ イソガニ	Hemigrapsus takanoi (Asakura and Watanabe, 2005)		1 q 近				2 1 椀	2 2 椀	2 2 近		2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀	甲長3cm、甲幅3.5cm程度。ケフサイソガニよりハサミの毛のふさが大きい。また腹部にある斑点が少ない。	
103			トリウミアカ イソモドキ	Sestrostoma toriumii (Takeda, 1974)							2 2 ア							砂地に生息する小型のカニで、スナモグリ類の掘った穴に共生することが知られている。（甲巾0.3cm・アナジャコ科・スナモグリ科の甲殻類の巣穴内に共生する）	
104		ケブカガニ科	マキトラノオ ガニ	Pilumnopus makianus (Rathbun, 1931)						2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀					和歌山県から沖縄県までに分布する。甲幅3cm。河口域や干潟に生息する。カキ礁やカキ群集の隙間に好んで棲む。同じような場所で見られることの多いシワオウギガニと比較すると、マキトラノオガニは甲面や歩脚に軟毛が粗生することで見分けられる。21椀ではカンザシゴカイの棲管で見つかった。	
105		コブシガニ科	マメコブシ ガニ	Pyrhila pisum (De Haan, 1841)		1 q 近									2 4 椀		2 5 椀	甲長15mm、甲幅15mmほど。甲は丸く、中央が盛り上がり、表面につぶつぶがある。干潟にいるコブシガニの仲間。前に向かって歩く。	
106		ベンケイガニ科	カクベンケイ ガニ	Parasesarma pictum (De Haan, 1835)			1 q 男		2 0 男									甲長2.3cm、甲幅2.6cm程度。甲羅はわずかに横長の四角形で、縁に歯はなく全体的に褐色。クリーム色のまだら模様がある。岩礁やアシ原に生息し、海水の影響が強い場所に多い。	
107			ユビケイカベン ガニ	Parasesarma tripectinis (Shen, 1940)					2 0 男									甲幅1.5mmほどで、カクベンケイガニより小型。和名通り鉗脚(ハサミ)の先が赤い。甲は扁平に近い。黄褐色の体色。汽水域の砂泥干潟やアシ原に生息するクシテガニとよく似ているが、クシテガニはハサミ全体が赤っぽいのに対して、本種はハサミの先だけが赤い。	
108			ヒメガンケ ガニ	Nanosesarma minutus (De Man, 1887)		1 q 近				2 1 椀	2 2 椀		2 3 椀					甲長0.6cm、甲幅0.7cm程度。甲の前縁中央部に深い窪みがある。前縁には眼後歯に切り込みがある。潮間帯の岩礁や貝類の間に生息する。干潟でも外洋側のカキ殻の間でも見つかる。	
109			フタバカク ガニ	Perisesarma bidens (De Haan, 1835)			1 q 男											甲長2.3cm、甲幅2.6cm程度。ハサミがオレンジ色に見えるものが多い。甲羅の横に切れ込みがある。汽水域の水辺にある転石の下や石積のすき間に隠れている。	

110	節足動物門	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	スナガニ科	ハクセンシ オマネキ	<i>Uca lactea</i> (De Haan, 1835)		1 9 近	1 9 男	2 0 男	2 1 樫	2 2 近						甲長1.2cm、甲幅2cmまで。ハサミは白く、片方が巨大化。それを白い扇(白扇)に見立てた和名。ウェイピングで大きなハサミを振り回す姿が潮を招くとされた。アシ原に巣穴を作る。干潟に出て砂に付着する有機物を食する。
111					マシ ネキ	<i>Uca arcuata</i> (De Haan, 1833)			1 9 男	2 0 男								甲長2.5cm、甲幅3.5cmまで。ハサミや脚は赤色を呈する。片方のハサミが巨大化。内湾や河口干潟のアシ原や泥地に生息。巣穴の上に土を積み上げえんとつ状にする。有明海沿岸の郷土料理「がん漬」の主要材料。
112					ツ ノ メ ガ ニ	<i>Ocypodidae</i> <i>ceratophthalmu</i> <i>s</i> (Pallas, 1772)							2 3 樫	2 3 近				甲幅4cmほどで、スナガニやミナミスナガニより大きい。沖縄諸島から西太平洋、インド洋の砂浜海岸に分布する。複眼の上に1本の突起があり、長いまつ毛が生えたように見える。また大鋏の顆粒列は下半分だけにある。
113					ス ナ ガ ニ	<i>Ocypode</i> <i>stimpsoni</i> (Ortmann, 1897)								2 4 ア	2 4 近			日本では東北地方以南、その他朝鮮半島・中国東岸・台湾まで東アジアの熱帯・温帯域に広く分布する。甲幅は3cmほど。甲は背中側にやや膨らんだ長方形。鋏脚は左右どちらかが大きい。複眼は大きく、目がついている柄を倒して眼窩（目の横のくぼみ）に収納できる。視力が良い。
114					ナ ン ヨ ウ ス ナ	<i>Ocypode</i> <i>sinensis</i> (Dai & Yang, 1985)							2 3 近					日本沿岸では北海道南部以南に、温帯性のスナガニが広く分賦していたが、近年の温暖化によって、熱帯・亜熱帯域を分布の中心とする南方系種のツノメガニ・ミナミスナガニ・ナンヨウスナガニが、主に南日本の太平洋沿岸や瀬戸内海等の内湾域に生息するようになっている。
115				ワタリガニ科	ガ ザ ミ (ワ タ リ ガ ニ)	<i>Portunus</i> <i>trituberculatus</i> (Miers, 1876)			1 9 男 (殻)		2 1 樫	2 2 ア	2 3 樫					甲長60mm、甲幅150mm程度。甲羅の横が強くつきだし大きなトゲのようになる。浅海砂底に生息。19男では脱皮殻が2個見つかる。大阪府岸和田市では、だんじり祭の際にガザミ(岸和田では通常ワタリガニと呼ぶ)を食べる風習がある。
116					タ イ ワ ン ガ ザ	<i>Portunus</i> <i>pelagicus</i> (Linnaeus, 1758)						2 2 近	2 3 近	2 4 近				比較的暖かい海域に多く、生息環境はガザミと重なりつつやや南方系。身体全体が青いのでアオガニと呼ぶ地域が多い。ハサミ脚を構成する節の中の、甲羅に近い長い節の前縁にある鋭いトゲの数が、タイワンガザミでは3本、「ガザミ」では4本か5本。
117					イ シ ガ ニ	<i>Charybdis</i> <i>japonica</i> A. Milne- Edwards, 1861						2 2 ア	2 2 近	2 3 近	2 4 ア	2 4 近		北海道南部から九州までの太平洋、日本海側。韓国、中国に分布。岩礁海岸の潮下帯に生息し、海中の岩石のすき間や海藻の間に潜む。甲幅は8cmほどだが、10cmを超える大型の個体もいる。

118	節足動物門	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	ヤドカリ科	コブヨコバサミ	Clibanarius infraspinus (Hilgendorf, 1869)							2 2 近		2 3 近		2 5 椀	河口干潟で見られる大型のヤドカリ。アカニシの殻を利用している事が多く、歩脚に鮮やかなオレンジ色の筋が入っているのが特徴。		
119				ホンヤドカリ科	ホンヤドカリ	Pagurus filholi (De Man, 1887)				2 0 男	2 1 椀	2 2 椀		2 3 椀		2 4 椀		甲長0.5～1.5cmの小型のヤドカリ。甲背、脚とも緑褐色だが、脚の先端が白く「白足袋を履いている」と言われる。はさみ(鋏脚=第1胸脚)は右側が大きい。人目に付きやすい第二触角は濃淡の縞模様となる。		
120					ユビナガホン	Pagurus minutus (Hess, 1865)			1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	2 2 近	2 3 椀	2 3 近	2 4 椀	2 4 近	2 5 椀	甲長0.5～1.5cmの小型のヤドカリ。灰緑褐色。歩脚は毛でおおわれている。はさみ(鋏脚=第1胸脚)は右側が大きく、表面に小さな顆粒が密にある。第2・3歩脚は指節(一番先)が前節(指節のすぐ下の節)よりも長く、これが和名「指長」の由来。
121				クルマエビ科	クルマエビ	Marsupenaeus japonicus (Bate, 1888)							2 2 ア							体長15cmほどだが、メスの中には30cmに達するものもいる。体は細長い円筒形で、脚は太く短い。生体の体色は青灰色か淡褐色で、黒いしまが頭胸甲には斜め、腹部には横に入る。日本産のクルマエビ科の中では最もしま模様が明瞭なので近縁種と区別できる。和名は腹を丸めた時に、しま模様が車輪のように見えることに由来する。
122					ヨシエビ	Metapenaeus ensis (De Haan, 1844)						2 1 椀								成体の体長はオス15cm、メス18cmほどに達し、同属種のシバエビやモエビより大型になる。甲は薄くて柔らかく、全面に細毛がある。新鮮な個体は褐色の地に細かい黒点が密布し、触角、脚、尾扇が赤褐色を帯びる。大阪では「しらさえび」、高知では「きえび」などと呼ばれる。
123				テナガエビ科	ユビナガスジエビ	Palaemon macrodactylus (Rathbun, 1902)						2 1 椀	2 2 椀ア							最大で体長4cmほど。汽水域や河口、干潟など様々な場所で見られるエビで、「ユビナガ」の名前の通りハサミ脚(第2胸脚)が長い(「テナガエビ」ほどではない)。体色は半透明で背中や腹部がやや褐色づいたものが多い。
124				テナガエビ科	スジエビモドキ	Palaemon serrifer (Stimpson, 1860)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 ア							体長4cmまで。ユビナガスジエビとよく似るが、本種の腹部の背中側にはスジ模様が入ることや、ユビナガスジエビの背中中心には薄い黄色い線が1本走るという特徴から区別できる。イソスジエビにも似るが、黒褐色の縞がイソスジエビよりまばらで、腰部分のベルト状の赤い縞が特徴。

125	節足動物門	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	テッポウエビ科	セジロムラサキエビ <i>Athanas japonicus</i> (Kubo, 1936)							2 2 ア							スナモグリやテッポウエビの巣穴に共生している小型のテッポウエビの仲間。背側に白い筋が入っていることが「セジロ」の由来。
126				テッポウエビ	<i>Alpheus brevicristatus</i> (De Haan, 1844)									2 3 近					日本を含む東アジア沿岸海域に分布し、内湾・浅海の砂泥底に生息。成体は体長5～7cmほど。はさみは左右で太さと形が異なる。大きいのはさみを開いてかち合わせ、大きな破裂音を出す。この時の衝撃圧によって外敵から身を守ったり、獲物を気絶させたりするとする。
127				アナジャコ科	ヨコヤコアナ <i>Upogebia yokoyai</i> Makarov, 1938				2 0 近		2 1 椀	2 2 椀	2 2 近				2 5 椀 S P 殻		泥干潟にY字型の深い巣穴を掘り、腹部にある遊泳脚を利用して海水の流れを起こし、口部付近に密生するヒゲでプランクトンや有機質の粒子を濾して食べる。日本の固有種で、東北地方から南西諸島の内湾や河口の干潟に生息している。
128			スナモグリ科	グニホン（ボケ）	<i>Callinassa japonica</i> (Ortmann, 1892)							2 2 ア			2 4 ア		2 5 ア		透明がかった白い色のエビで、片方のはさみだけが不釣り合いに大きく、挟まれるとかなり痛い。潮が引いたときの潮だまりの中や周りで、周りの砂よりも黒ずんだ富士山状の巣穴を作る。巣穴は深く、4～5mに達することもある。甲は柔らかい。釣りエサとしては「ぼけ」と呼ばれる。
129				ハルマンズナモグリ	<i>Neotrypaea harmandi</i> (Bouvier, 1901)									2 3 ア					日本には3種のスナモグリが棲息する3種の1。本種の他に、ニホンスナモグリとスナモグリがいる。砂地に穴を掘って生活する。形態や生態がよく似たニホンスナモグリよりも黒目が大きいのが特徴。
130			ヨコエビ目		ヨコエビ類 <i>Amphipoda</i> sp.							2 2 椀 ア	2 2 近		2 3 近	2 4 椀	2 5 椀		体をヨコにして素早く歩き回ることが、和名の由来。多くの種類で体長5mm～1cm程度。捕食者から逃げるため、彼らは岩の隙間や石の下などに潜り込み、身を隠しながら暮らしている。
131				ウンボソコエビ科	ニホンドロソコエビ <i>Grandidierella japonica</i> Stephensen, 1938												2 4 椀		内湾性で、河口干潟や前浜干潟の潮間帯下部から潮下帯上部にかけて生息する。泥底あるいは砂泥底を掘り、筒状の巣を作って棲む。転石下にいることもある。主に懸濁物食者で、剛毛が生えた触角を使うなどして餌を集める。

132	棘皮動物門	ヒトデ綱	マヒトデ目	マヒトデ科	マヒトデ	Asterias amurensis (Lütken, 1871)		1 9 近											幅長(ふくちょう、ヒトデの中心から、腕の先端までの長さ)15cm。黄色の身体に青紫色の模様があるが、色や模様は個体差が大きい。湾内だけでなく外洋に面した砂地の浅瀬にも生息。基本的にアサリを襲って食べるのでアサリの産地などでは駆除の対象となっている。	
133			アカヒトデ目	イトマキヒトデ科	イトマキヒトデ	Patiria pectinifera (Müller and Troschel, 1842)											2 5 ア	幅長は7cm程度。表面は濃青緑から黒色に近い地色に、赤いまだら模様がある。裏側(口側)に密生する管足で移動し、動物の死骸や貝類を食べる。足は5本だが、時折4本や6本、まれにそれ以上の分岐を持つ個体も存在する。足の間の切れ込みは浅い。		
134			ナマコ綱	イカリナマコ目	イカリナマコ科	ヒモイカリナマコ	Patinapta ooplax (von Marenzeller, 1882)			2 0 近	2 0 男		2 2 椀	2 2 近				2 4 近	2 5 椀	体長10数cm、径5mm。干潟の泥の中に生息。浮遊していることが多い。ヒモイカリナマコツマミガイ(本表NO. 48)が体内に棲んでいることがある。 ヒモイカリナマコツマミガイ→ 
135	脊索動物門	条鰭綱	スズキ目	ウナギ目	アナゴ科	マアナゴ	Conger myriaster (Brevoort, 1856)							2 2 近					浅い海の砂泥底に生息する美味な食幼魚。幼生のレプトケファルスは、「のれそれ」と呼ばれ、食用にされる。高知県では、生きたまま土佐酢、三杯酢などにくぐらせて、踊り食いすることが多い。	
136				アジ科	イケカツオ	Scomberoides lysan (Forsskal, 1775)								2 2 近					アジ科に分類される熱帯性の海水魚の一種。幼魚は汽水域を含む沿岸の浅海、成魚は礁周辺に生息し、主に単独または小さな群れで行動する最大で全長110cmに達する。全体に銀色で、背びれと尾びれは暗い色であり、側線の上下に暗い斑点の列がある。	
137				アイナメ科	クジメ	Hexagrammos agrammus (Temminck & Schlegel, 1844)								2 2 近					30cm前後になる。アイナメに似るが、尾鰭の後縁が丸く弧を描く。アイナメは直線。三重県志摩市波切では、本種から脂を取り「ケガをした目(くじいた目)を治す薬」とするところから「クジメ」という。	
138				タイ科	クロダイ	Acanthopagrus schlegelii (Bleeker, 1854)								2 2 近						別名チヌ。内湾、汽水域や沿岸の岩礁。雑食性。仔魚はすべてオス。15~25cmくらいは両性型。3年目からは雌雄が分かれ、それぞれ成熟し産卵活動をする。さらに大きくなると多くがメスに分化する。
139				ハゼ科	ミミズハゼ	Luciogobius guttatus (Gill, 1859)		1 9 近		2 0 近				2 2 近				2 4 椀		全長5~10cm円筒形。頭は押しつぶされたように平たい。体色は、濃緑褐色。ヌルヌルとした粘膜で覆われる。ヒレは、丸みをおびる。鱗がない魚で小さなウナギかドジョウのような外見。河口の汽水域石や砂の間にいる、肉食でゴカイ、ヨコエビを捕食。

140	脊索動物門	条鰭綱	スズキ目	ハゼ科	ズイソハゼ	Luciogobius martellii (Di Caporiacco, 1948)						2 1 椀				2 3 近			ミミズハゼに似ているが、尾鰭の縁辺が透明若しくは白色であることで識別できる。河口や内湾の砂礫底に生息し、砂礫やカキ殻の隙間に潜む。		
141					ウロハゼ	Glossogobius olivaceus (Temminck et Schlegel, 1845)		1 9 近	1 9 男											体長20cmを超えることもある大型種。洞鯨（ウロハゼ）。東アジアの内湾や汽水域。夏が旬でハゼの天ぷらにされる事が多い。利用法はマハゼとほぼ同様で、唐揚げ、天ぷら、刺身などで食べられる。	
142					マハゼ	Acanthogobius flavimanus (Temminck et Schlegel, 1845)				2 0 近				2 2 近							体長15cm。旬は秋から冬にかけてとされる。美味な白身魚で、天ぷら、唐揚げ、刺身、吸い物の椀種、煮付け、甘露煮などいろいろな料理で食べられる。秋になると近木川はハゼ釣りのメッカとなる。
143					アカオゼビシマハ	Tridentiger trigonocephalus (Gill, 1859)								2 2 近							体長8cm。頭部腹面に白色点がないこと、ことから区別することができる。内湾に生息し、河川流入の影響のない磯場や潮間帯岩礁域のタイドプールの中でもみられる。泥底の石やその他の障害物の間にすむ。シモフリシマハゼとよく似るが、臀鰭に2本の赤色縦線がある。
144					ヒナハゼ	Redigobius bikolanus (Maeda, Saeki, and Satoh, 1927)				2 0 近											最大体長4cmの小型種。汽水域から淡水域に生息。体長9cm前後のヒメハゼとは別種。
145					ヒメハゼ	Favonigobius gymnauchen (Bleeker, 1860)						2 1 椀 (幼)	2 2 ア							2 5 ア	体長は6cmから8cm、体色は黄褐色を基調とし、側面には暗色の斑が4つ並ぶ。 尾鰭の基底にある黒色斑は成長に伴い二又する。雄のみ成熟すると第1背鰭の第2棘が糸状に伸びる。水深15mより浅い内湾の砂泥底に生息する。アマモ場や河口にも住む。
146					チチブ	Tridentiger obscurus (Temminck et Schlegel,1845)				2 0 近											体長8cm。他のハゼ類と比較して太く短い体形をしている。河口域や河川下流部の礫や転石、 テトラポッドなどの周辺に生息。ムナビレの根元は黄色
147					ドロメ	Chaenogobius gulosus (Guichenot, 1882)		1 9 近													体長12cm。上から押しつぶされたように平たい頭と大きな口をもつ。尾びれが白くふちどられることが特徴。ごく浅い岩礁域(数mまで)、岩礁性海岸の潮だまりに生息。成魚は海底にいるが、幼魚は水中を群れて動く。

148	脊索動物門	条鰭綱	スズキ目	メバル科	シロメバル	Sebastes cheni (Barsukov,1988)									2 2 近						体調25cm前後。体色は黒か、灰色でときに薄い暗色の横帯が出る。従来、アカメバル・クロメバル・シロメバルは一種で「メバル」とされてきたが、2008年に3種に分類された。胸鰭の軟条がアカメバル15、クロメバル16、シロメバル17。疑似出産をする。		
149				クロサギ科	クロサギ	Gerres equulus (Temminck and Schlegel, 1844)									2 2 近						成魚は全長25cmに達する。体は側扁し広葉樹の葉のような体形である。目が比較的大きく、目の前に吻が尖る。本州・四国・九州・朝鮮半島南部の周辺沿岸海域に分布する。産卵期は夏で、夏から秋にかけては全長1-5cmほどの稚魚が内湾の波打ち際付近で観察される。		
150				シマイサキ科	シマイサキ	Rhynchopelates oxyrhynchus (Temminck & Schlegel, 1842)									2 2 近	2 3 ア						全長は20～40cm。体はやや細長く側扁し、口は小さく先がとがる。主に内湾や汽水域生息し、特に河口に広がるアマモ場では、夏になると、幼魚がよく捕れる。幼魚は河川の淡水域まで遡上する。	
151				ニシキギ科	ギンポ類	Pholis sp.										2 2 近							潮だまりや潮間帯～水深20mあたり、ときに水深200m、砂泥地あるいは岩礁域の石の間に生息。
152				フグ目	フグ科	クサフグ	Takifugu niphobles (Jordan and Snyder, 1901)					2 0 男											体長10～25cm。背中が草色。体中にテトロドキシン(ふぐ毒)を持つ(筋肉の毒性は弱い)。投げ釣りやうき釣りなどでよく掛かり、外道の代表としてとして嫌われている。
153		軟骨魚綱	ガンギエイ目		ガンギエイの卵	Rajiformes sp.										2 3 ア						ガンギエイ類は卵生。カスベという別名がある。ユネスコの無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の一つ秋田県の土崎港祭は「カスベ祭」ともよばれ、カスベ料理がつきもの。卵は、長方形で四隅に突起のある褐色の硬いカプセルに包まれている。	
合計							54	31	37	45	49	63	58	46	44	56	35	45	0				

凡例① 「19男」・「21檜」などの2桁数字は2000年代。近＝近木川河口 男＝男里川河口 檜＝檜井川河口 ア＝檜井川河口南の砂浜(かつてのアマモ場)。

凡例② 「植物食性」は 藻類を食べる食性。
「雑食性」は 藻類や有機物を食べる食性。
「肉食性」は 貝やフジツボなどを食べる食性。
「懸濁物食性」は 水中に浮遊するプランクトンや有機物を食べる食性。
「堆積物食性」は 海底に降りてくるプランクトンや有機物を食べる食性。

作成 森と海の自然科 福嶋昭治